エコビレッジ「自立」と「共存」との両立を目指して

東海大学国際地域学研究科
新谷　舞子


風力発電大国、デンマーク

□はじめに

私は現在、東海大学大学院の国際地域学研究科に籍を置き、「エコビレッジ」に関する研究を行っている。この小さな〝コミュニティー〟であり、〝社会〟であり、〝ムーブメント〟に、私は「持続可能な未来」に向けた大きな可能性と、希望を感じている。

エコビレッジの〝存在〟を知ったのは、約1年半前に見たBS朝日の番組、「北欧　デンマークの風に吹かれて～高樹沙耶のグリーン・ジャーニー～」であった。そこには、人々が環境に負荷を及ぼさないように努力をしながら、ゆるやかに、穏やかに、楽しそうに生活をしている様子が映し出されていた。このようなエコビレッジでの生活は、とても魅力的に映った。そして現在、このエコビレッジの〝必要性〟を感じている。それはごく自然な流れの中であった。

私は学部時代から現在にかけて、デンマーク社会について研究をしてきた。デンマークに興味を持った理由は挙げればいくらでもあるが、「国民の生活満足度が高い国」であることが大きい。実際2008年に、デンマークは〝幸福度ナンバー1の国〟に選ばれている。一人ひとりの国民が大事にされ、豊かに生きるためにあるべき社会を追求し、実現している。そしてこのような成熟した社会を創っているのは、多様性を重んじながら責任を負っている、自立した個人一人ひとりなのだ。「個人」と「社会」との関係が密で、濃い。一方、寛容でない、多様性を認めずに尊重しない、一生懸命が報われにくい、息苦しい、分断化している…など、決して良い状況であるとは感じられない、現在の日本の社会。

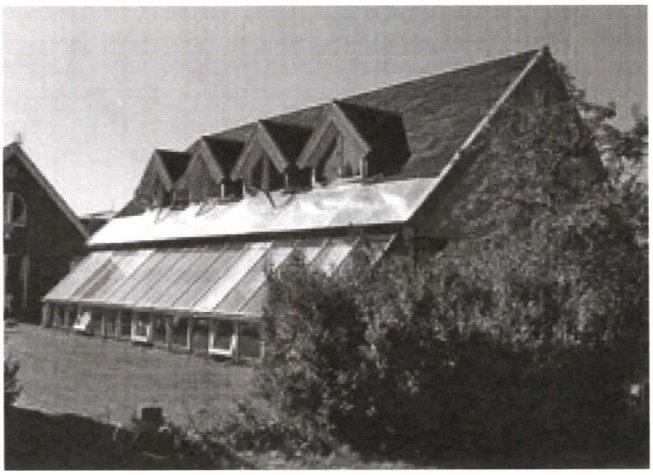
私はこれからの日本社会を創造するために、4つの〝K〟がキーワードになると考えている。「教育（共育）」「共生」「協働」「環境」の4Kだ。この4Kを実際に具現化し、また実現を可能に出来るフィールドが、「エコビレッジ」にあると思った。

そこで2008年の夏休み、デンマークにあるエコビレッジを訪問、滞在してきた。当号から複数回、日本におけるエコビレッジの先行事例も含めて、ご紹介する。

□エコビレッジとは

多様なエコビレッジ

実は「エコビレッジとは何か」を説明することは容易ではない。というのも、世界各国に在るエコビレッジは、それぞれにカラーがあり、多様で多彩なのだ。実際、2ヵ月間のデンマーク滞在中に4つのエコビレッジを訪れたが、特徴も雰囲気もさまざまであった。それぞれそこに住む人々の考えや想い、ライフスタイルなどが反映され、これらに合わせて


広いテラスの大きな窓からふんだんに陽が差し込む家（エコビレッジ「トーラップ」）

創り上げられている。共通している部分と言えば、生活の中に〝共〟の部分があること、住民全員が自身の住むエコビレッジの運営に携わっていること、そして人と共に生きるという社会面においても、環境面においても、「持続可能性」を追求し、実践していることが挙げられるだろう。

エコビレッジの定義についての説明も、いくつかある。エコビレッジの国際的なネットワーク機関であるGlobal Ecovillage Network（GEN）では、「助け合いの社会環境と、周りの自然環境に影響を及ぼさない生き方をするために、努力をする人々の集まり」であると、紹介している。また環境総合誌『Bio City』（no.39）によると、「地球環境やコミュニティーのためだけでなく、〝より人間らしく〟、〝より自分らしく〟生きることを目指す人々の集まり」であるという。さらに「環境」「経済」「世界観」「国際」の4つの側面からエコビレッジについての教育を提供しているEcovillage Design Education（EDE）では、「行政や企業主導ではなく、自分たちでコミュニティーの在り方を考え、楽しみながら積極的につくりあげていく」ものが、エコビレッジだと解説している。

実験の場

このように、それぞれの形があり、また説明もさまざまであるのは、エコビレッジ自体がまだ発展中の〝実験の場〟であるからだろう。完成型はなく、決まった答えなどはない。みんな違って、みんな良いのだ。

前述のGlobal Ecovillage Networkに紹介されているエコビレッジは、415にのぼる。内訳は、アジアが12、オセアニアが41、中東が5、南北アメリカが162、ヨーロッパが148、アフリカが47である。別の資料では、世界には1万5千ものエコビレッジがあるという。しかし、実際の数は分からない。今この瞬間にも、どこかで新しいコミュニティーが生まれているかもしれない。

私が思うエコビレッジ

ただ環境に配慮した住宅の集まりを「エコビレッジ」と呼ぶのではなく、自身のこと、他の人のこと、地域のこと、他の生命体のこと、環境のこと、他国のこと、世界のこと、未来のことなど、幅広い視野を持ち、「どうあるべきか」「どうありたいのか」を自らの頭で考え、自らの感性で受け、自らの手で〝意図的に〟創り上げていくコミュニティーがエコビレッジであると、私は考えている。エコビレッジのようなコミュニティーが、日本各地、世界各国にどんどん増えていき、やがてすべての共同体がつながっていくイメージを、大きな理想として抱いている。

□エコビレッジの必要性

エコビレッジの必要性について、私が思うことを一例として、次に挙げてみる。

「生み出していく力」

昨年の6月、「半農半X」の提唱者である塩見直紀さんの講演会が、札幌で開かれた。

半農半Xとは、「農業」と自身の天職である「X」とを、両立させて生きる人たちのことを指す。塩見さんはこの講演中、「私たちはまるで、地球に生きる最後の人々のように生きている」と話していた。まさにその通りだ。あたかもあと数十年で地球が終わるかのように、資源を使い、大量に物を消費し、生きている。

しかし例えば石油に代わる燃料として、自分で薪を切ってくべてみる。すると多大な労力と根気と時間が必要なことに、気がつく。代替するものを自分で生み出すことで、実際にあたり前として存在しているものの「価値」を知る。有限の資源の中で、自然に出来るだけ負荷をかけないように生きることの重要性を、身を持って感じるのではないか。

そして今回の金融危機、経済不況で明るみになったのは「生み出していく力」を身につけていく必要性ではないかと思う。それはやりたいことや出来ることを「生業」としていく実現力、創造的なアイディア、明確なビジョン、広くて深いネットワーク構築など、さまざまな能力だ。激変する社会の中で、いかに自分らしく、生きたいように生きるか。生み出し、創造していく力を育てていくことが、求められているのではな

いだろうか。

「Global Responsibility」（地球規模での責任）

「おいしいコーヒーの真実」というドキュメンタリー映画がある。この映画には、コーヒー発祥の地であり、アフリカ大陸最大の生産地であるエチオピアでの、「コーヒー栽培の現状」が映し出されていた。

コーヒーの国際価格は、ニューヨークとロンドンの取引所で決められ、現実には、多国籍企業4社がコーヒーを〝支配〟しているという。そしてこのコーヒー価格の根底にあるのは、途上国に住む人々の〝低賃金労働〟だ。彼らは働けど十分な賃金を受け取れない上、コーヒー豆を育てるために、自分たちの食物を生産することが出来ない。まさに貧困の悪循環の中で、必死に生きているのだ。彼らから過剰な労働力を搾取し、さらに夢や希望まで奪い取っている現状。しかし彼らが望んでいるのは、援助ではなく、「公正な貿易」と「教育の機会」なのだ。

私たちが普段飲んでいる1杯のコーヒーが、貧しさに苦しむ人々を生み出している。しかし日本人の多くは、この事実を知らない。この「知らない」ということが、罪になることを知り、とても怖くなった。私たちが知らない、気付かない、想像しない、考えが及ばないがために、生み出される負のサイクルが存在している。

これだけグローバルに、資源や資本や労働力といったものが交錯している中で、日本は圧倒的に恩恵を受けている面が多い。しかし私たち日本人、先進国に住む人間の行動が、以上のような他国、後世、地球からの搾取、略奪、破壊を生み出している。そうであるならば、きちんとこれらの事実に向かい合わなければならない。それは「地球規模での責任」を、国家や政治のレベルだけでなく、私たち市民一人一人が持つことではないだろうか。

以上から、個々人が真に「自立」をしなければいけないのだと感じる。それは食糧、エネルギー、衣住などのハード面における自給自足はもちろん、心の内面においてもだ。「自由」を得るとともに、「責任」を負う。これこそ、自立を確立する最低条件ではないだろうか。「自らが考え、参画し、生み出す」ことで生まれるエコビレッジは、こうした〝自立した人間〟が育つプラットホームとしても、大きな可能性を秘めていると感じている。

新しいコミュニティーの創造

高度経済成長とともに得た「物質的な豊かさ」の反面で、失ったものも多々ある。その1つに、「コミュニティーの崩壊」が挙げられるだろう。核家族化による血縁の希薄化、都市集中化による地縁の衰退など、それまでのあらゆる〝縁〟が薄れ、存続の危機に瀕している。都会では隣に誰が住んでいるのか分からない状況が、地方では「限界集落」と呼ばれる状況が、生まれてきている。このような二極化、分断化はますます加速している。また「都会と田舎」の分断に派生するように、「生産者と消費者」という二者に分かれ、〝物〟を通してのみの交流が当たり前になってきている。こうした状況の中で、しかしただ昔に戻るということではなく、新しいコミュニティーの構築が可能なのではないだろうか、と考えている。私が1ヵ月間滞在したエコビレッジ「スバンホルム（Svanholm）」では、子供が出来たことがきっかけとなって越してきた、という家族が数家族いた。自然豊かで、顔見知りのたくさんいる中で子供を育てられるという環境に、引き寄せられてくる。このように価値観、感性、考え、ライフスタイル志向などが、コミュニティーの1つの核となる。ここに私は面白さを感じている。

周りの社会から孤立しがちになるのも事実だが、交流やコラボレーシ



年に一度のフェスティバルに集うエコビレッジ「スバンホルム」の〝村民〟たち

ョンなど、〝持てるもの〟を交換し、積極的に地域と関わりをもっているビレッジもある。またエコビレッジへの訪問客やゲストワーカーの滞在などが、地域全体の活性化に寄与している事例もあるのだ。まさしく「共生」している図が、ここにはある。

□デンマークにおけるエコビレッジの現状

「コレクティブハウス」の発祥の国

Global Ecovillage Neiwork によると、デンマークには6つのエコビレッジがある。「コレクティブハウス」という住まい方が定着していることが、デンマークにおけるエコビレッジの誕生、存続を可能にしている要因の一つであるだろう、と思う。

コレクティブハウスが生まれた背景にはさまざまな要因があるが、その1つに、1960年代の女性の社会進出が挙げられる。「仕事か育児か」ではなく、「仕事も育児も」と、その両立を可能にする暮らし方を追求した結果、創られた住まい方だ。日本ではまだあまり定着していないが、コレクティブハウスとは、自身の住居の他に、他の住民と生活を共に出来る「共有スペース」がある住宅様式のことである。共有スペースには、キッチンやダイニングルームはもちろん、子供のプレイルームやゲストルーム、パーティルームなどを有しているところもある。日曜大工の道具や耐久消費財など、1人1つは必要がないものを共同で購入し、共有して使える。ムダがなく効率的な上に、趣味の幅が広がり、生活に深みが出る。しかしより特筆すべきは、このようなハード面のメリットだけでなく、そのスペースで住民同士が話をしたり、子供と遊んだり、一緒に食事を作って食べること（「コモンミール」）などを通して、時間や経験、想い、考えといった〝ソフト〟な部分も、シェアしているということだ。とても豊かな暮らしだと感じる。

まだ主流ではない、エコビレッジ

だが実際は、デンマークにおいてもエコビレッジは、決して主流ではないようだ。知れ渡った存在であると思っていたが、首都コペンハーゲン市で出会ったデンマーク人のほとんどが、「エコビレッジ」の言葉すら知らなかった。知っていても「それは少数派だよ」とズバッと言う人もいたぐらいだ。確かに、後の号でご紹介する「クリスチャニア（Christiania）」以外のエコビレッジは、街の中心部から離れた自然豊かな場所にある。コペンハーゲン市内に住む人たちは、エコビレッジを知らなくても不思議ではないかもしれない。

個性豊かなエコビレッジ

今回から複数回に渡り、貴重な誌面をいただき、デンマークにおけるエコビレッジの実状、そして日本におけるエコビレッジの先行事例をご紹介するが、少しだけ、デンマークのそれぞれのエコビレッジについての説明を記そうと思う。

08年9月3日から30日まで、約1ヵ月の間滞在させてもらった「スバンホルム（Svanholm）」は、30年も前から有機農業、酪農業を行っており、まさにその道の〝パイオニア〟である。コペンハーゲン市内のスーパーマーケットでは、Svanholm産のジャガイモやニンジン、牛乳などをよく見かけた。

コペンハーゲン市の中心に位置する「Christiania」は、エコビレッジというより、〝Free Town（フリータウン）〟という言葉が似合う。この言葉の意味するところは、後の号で詳述する。ここChristianiaは、デンマーク国内第3位の観光客数を誇る一大観光地となっている。芸術性が高く、さまざまなお店が立ち並ぶ。至るところで音楽が流れ、日を引くアートが点在している。ビレッジ内では、約60もの職業を生み出しているそうだ。

「トーラップ（Torup）」では、環境に配慮したさまざまな試みを、熱心に行っている。自然エネルギーの創出、汚水の浄化、屋上緑化、自然素材を用いた住宅の建設などだ。そしてこれら住居ひとつひとつが、それぞれエコポイントを有している。見ているだけで楽しくなってしまうビレッジだ。

次号ではSvanholmについて、より詳しくご紹介する。

（48頁に関連写真があります）



エコビレッジ「クリスチャニア」の村内風景

エコビレッジ「自立」と「共存」との両立を目指して（第2回）

東海大学国際地域学研究科　新谷　舞子

スバンホルムの例

□概要

デンマークにおける有機農業のパイオニアである「スバンホルム（Svanholm）」というエコビレッジに、2008年9月3日から30日までの約1カ月間、滞在した。週30時間の労働で、食と住が無料で提供される「ゲストワーカー」として、昨年創立30年目を迎えたスバンホルムの暮らしを体験してきた。



スバンホルムの正面入り口

スバンホルムは、「コレクティブハウス」として始まった。初期メンバーの1人は、このような暮らし方を選択した理由として、「さまざまな職業に従事する人たちとともに、自身の仕事である農業を行い、共に生きていきたいと思っていた」と話してくれた。住民はもともと〝お城〟であった建物を修理しながら丁寧に暮らしている。良い物を長く使う、北欧の人々の文化を感じる。この他にも、住民の増加に伴って新しく住居を増築しているので、現在は全部で15棟ほどを所有している。

現在、スバンホルムには約130人の住民がいる。特に小さい子供のいる家族と、高齢者が多く住んでいる印象を受けた。首都、コペンハーゲン市から西へ約55キロのところに位置し、市の中心部へは電車とバスで約1時間半かかる。ただし最寄り駅の「Frederiksund」駅まで出るバスは1時間に1本しかないため、街に出るには少々不便であるが、自転車で20分行ったところにはビーチがあり、30分ほど走ったところには大きな森があるので、自然環境に恵まれている。

ここスバンホルムの特徴を表すキーワードは、「収入の共有」「自治」「食糧とエネルギーの自給自足」になるだろう。それぞれについて、以下より詳しく説明していきたい。

□収入の共有

〝ひとつの財布〟の共有

スバンホルムの住民は、自身の収入の8割をビレッジに預け、残りの2割を手元に残して生活をしている。実際、住民の約6割はスバンホルム内で働いているが、残り4割の外で働く住民も、同様に所得の8割を預けている。つまり〝ひとつの財布〟を共有しているのだ。その分、歯の治療代など一部の支出を除き、ビレッジが住民の生活費、税金、年金などを管理している。

デンマークは〝高負担高福祉国家〟として知られているように、所得税は50％～60％ほど、消費税は25％課税されるが、その分、教育費、医療費はほぼ無料という。「所得の再分配」がなされている国である。このような国の土壌はあるものの、8割の収入を預けるというスバンホルムの共有度の高さには驚く。数年前まではすべての収入をビレッジに預け、そこから所得の大小に関わらず均等にお小遣いを受け取るシステム

であったが、不満が生じたために、現在の仕組みに変更したそうだ。

委員会の設置

「スバンホルムでは経営を厳しくしている」と初期メンバーの1人であるBo Lassseさんは言っていた。ビレッジ内にはキッチングループ、建築グループ、農業グループ、行政グループ、ゲストグループなどのさまざまなグループがあるが、近年、各グループにそれぞれ委員会が設けられたそうだ。この委員会は、他のグループから2人、ビレッジ外から1人の3人で構成されており、そのグループの経営を外部からアドバイスする機関として機能しているそうだ。より効率的な経営をしていく為に必要である、と判断をしたのだろう。今後のビレッジ運営を考えると、「外で働く人を増やしたい」とのことだ。ビレッジ外の職業の方が、所得をより得られるからだと思う。

□自治

「リーダーはいない」

130人もの人々が暮らしているので、ビレッジの運営は決して簡単ではない。住民自らが、自身の住むコミュニティの「自治」を行っている。しかし特定のリーダーや代表がいるわけではない。みな口を揃えて「リーダーはいない」と言うのだ。例えば、食事のメニューはキッチングループが決めるのだが、その際、グループの誰か一人が指示を出すのではなく、それぞれが自分の得意な料理やその日に作りたい料理、冷蔵庫にある材料に合わせた料理などのプランを出し、その上で最終的に決めている。

みんなが主役で、みんなが平等。デンマークという国自体、上下関係を作らず、フラットな関係を好む文化があるが、ここスバンホルムもまさにそのような雰囲気を感じる。みんなで「スバンホルム」を創り上げているのだ。

週1回のミーティング

毎週火曜日の夜7時半からは、ミーティングが持たれる。最終週の火曜日は、何か決定を下すミーティングで、それ以外の週は話し合いだそうだ。

ミーティングは誰にでも開かれていて、ゲストワーカーでも参加可能である。事前に内容が公表されるので、自分の興味関心に合わせて出席出来る。私が見学した時は、30人ほどが来ていた。あとから聞いた話によると、この時はキッチンのデザインについて話し合っていたようだ。

ミーティングそのものは至ってインフォーマルなもので、途中参加、退室も可能だ。コーヒーを飲み、ケーキを食べ、また寝ころびながら参加している人もいた。

全員一致まで議論

ミーティングでは「全員一致」まで議論を続けるという。多数決ではなく、全員が納得して賛成をするまで、話し合いをするのだそうだ。時間と労力がかかる。忍耐と寛容性も必要だ。しかしこのような〝プロセス重視〟の丁寧な姿勢が、コミュニティを内面から維持しているのだろう。「膨大な時間がかかるし、忍耐が必要ですね」と尋ねたところ、「NO」というからには、その案に見合う代替案を示す必要があるから、みんなだいたい「YES」に回るよ。（笑）」と教えてくれた。この事実に同感する気持ちもあり、また内実を垣間見られたような気がした。

□食糧とエネルギーの自給自足

ほぼ自給自足を達成している食糧事情

スバンホルムでは食糧はほぼ自給、エネルギーは完全自給を達成している。

約230ヘクタールの農地を有し、ジャガイモ、トウモロコシ、ニンジン、豆類などの野菜と、数種類のリンゴ、洋ナシなどの果物を栽培している。ブラックベリーは野生の木があり、取り放題であった。農薬、化学肥料は一切使わない、有機栽培をしている。しかし大規模農業で、例えばジャガイモを収穫する〝マシーン〟があり、4～5人の人間が乗り込み、掘り起こしたその場で、ジャガイモとその他のもの（石、泥、茎など）を分別する。

コモンミール（共食）で出される食事のほとんどは、こうしたビレッジ内で生産した食物が主で、パンやケーキも手作りだ。米、肉、魚、茶、調味料などは、外部から購入しているが、これらも出来るだけ有機



これぞポテトマシーン

のものにこだわっているという。

エネルギーは完全自給を達成

スバンホルムでは2機の風力発電機を所有していて、エネルギーを完全に自給している。風力発電や太陽光発電といった「自然エネルギー」は、気候や環境の変化に応じてエネルギー量が変化する。日本でもこの点が少しネックになって、自然エネルギーの導入がなかなか進まないが、私がスバンホルムにいた1カ月間、エネルギーの問題は何も起こらなかった。常に安定した電力が確保出来ていた。

他にも、環境に負荷をかけないためにさまざまな取り組みを行っている。森林内の枝や木のカスは「セントラルヒーティング」に利用しており、自動車を共有して使う「カーシェアリング」も実践している。さらにコモンミールとして食事を一度に作ってしまうことで、エネルギーと水道量の節約につながっている。〝集住する〟ことで生み出される大きなメリットだ。

□〝共育〟する環境

スバンホルム内には保育施設が一つあり、子供を預けることが出来る。

滞在中、子ども連れの数家族が集まって談笑したり、天気の良い日には一緒にごはんを食べたりしている光景をよく見かけた。前述のBoさんは、「自分の子どもの〝子ども時代〟には、自信と誇りを持っている」と胸を張っていた。顔見知りの中で育てられるという安心感がある。職業も、価値観も、経験も、考え方も違うさまざまな大人がいて、その大人たちが自分の子どもと接する。多様性に溢れたこのような環境で子育てが出来ることは、とても貴重なことだと感じる。

また閉鎖的になりがちな子育ても、仲間がいることで、想いや経験を共有し合える。これは「仕事と家庭の両立」といったハード面よりも、より大きな意味合いを持つと思う。従来の教えて育てる「教育」から、共に育て、共に育つ「共育」へ。つながりが希薄な現代だからこそ、そして多様性が求められる時代だからこそ、「共育」はさらに重要性を増すのではないか、と考える。

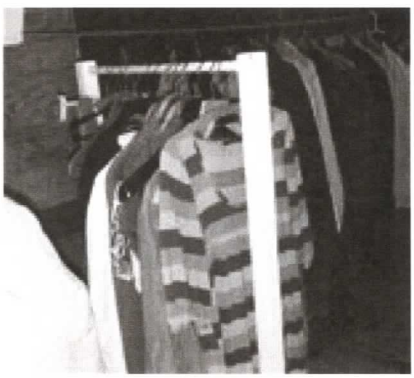
□リユース&リサイクル

残り物の再活用

スバンホルムでは、まず食べ物の残り物を出さないようにしている。夕食の残り物は一旦、冷蔵庫で保管され、次の日の昼食として再度出てくる。新しい料理も加えて出されるが、前日の残り物が主であった。しかし衛生的にはもちろん、心理的にも全く問題を感じなかった。むしろ「残り物を出さない」というこの姿勢に感銘を受けた。それでも出てしまう残り物や不可食部分の生ごみは、コンポストで肥料にし、農場に使用している。まさに〝循環〟システムだ。不要か必要かの判断は、私たちの意識のあり方、気持ちの持ちようでいくらでも変わってくる。

リサイクルルームの設置

コモンハウスの2階にはリサイクルルームがあり、住民は不要になった衣類、小物などをそこに置いておく。他の人はこれらを自由に持ちだし、使用出来る仕組みとなっている。9月は思いのほか寒かったので、私もトレーナーやカーディガン、ズボン、ジャケットまでここから貸してもらい、とても助かった。さらにここで回収した古着はセネガルに送付しており、途上国支援の役目も果たしている。出来ることを着実に行う、見習うべき姿勢だと思った。ひとつの行為が幾重にも意味をもつ。


リサイクルルーム

□ゲストワーカーとしての暮らし

世界中から集まるゲストワーカー

スバンホルムでは、常時ボランティアやゲストワーカーを募集しており、また世界中の有機農場経営者とそこで働き、学びたい人たちのネットワークであるWorldwide Opportunities on Organic Farms(WWOOF)のホストとしても登録されている。特に私の滞在した夏は、ちょうど農作物の収穫期にあたり、総勢14人のゲストワーカーと出会った。彼らの出身地は実に多様であり、スペイン人3人、オーストリア人家族の3人、イスラエル人2人、デンマーク人2人、オーストラリア人1人、ドイツ人1人、フィンランド人1人、ロシア人1人であった。年齢層は20～30代がほとんどで、共通語は英語だった。それぞれの国民性を感じることもあり、私自身も日本人である

ことを認識する瞬間が多くあった。彼らとの出会いが嬉しく、一緒に過ごした時間はとても楽しかった。

ワーキンググループ

ゲストワーカーが配属されるワーキンググループは、「キッチングループ」「建築グループ」「農業グループ」の3つである。それぞれに説明を加えていくと、「キッチングループ」はランチとディナーの準備をする。夕食のない月曜日と水曜日は、キッチンの一斉掃除に取り掛かる。「建築グループ」の仕事は、住居のメンテナンス、窓の補修、ペンキ塗りなどだ。最後に私の所属していた「農業グループ」は、主に有機野菜、果物の収穫を行う。9月はちょうどジャガイモの収穫時期で、ほぼ毎日「ポテトマシーン」に乗り、ジャガイモとその他のものとの選別をしていた。騒音の中での単純作業はなかなか辛いものがあったが、自分たちが選別したジャガイモが食卓にのぼる時には、感慨深い気持ちになった。


パーティーには子ども達も出店

□かかわり

住民とゲストワーカー

ビレッジの住民と私たちゲストワーカーとの間に、〝壁〟を感じることがあった。それは他のゲストワーカーたちも感じていたようだった。コモンミールの際も、ほとんど「住民」と「ゲストワーカー」とで分かれていた。前述したように、世界各国からさまざまな人が集まってきている。しかし交流会やウェルカムパーティーなど、お互いを知り合う、紹介し合う機会がまったくなかった。ビレッジ内でこのような壁を感じることは悲しく、もったいないと思った。個人個人の世界観が広がるきっかけとなる、このような出会い。私だったらさまざまなイベントや仕掛けを作りたいな、と考えていた。


陽気なゲストワーカーたち

周りの社会とのかかわり

スバンホルムには1軒のオーガニックショップがあり、顧客の9割は村外の人々だそうだ。また毎月第1土曜日には見学ツアーを開催しており、年に1度開催されるパーティーも、外部に開かれている。しかし、村の中にいればほとんどのことが事足りてしまうこともあり、ビレッジ外に住む人たちとの交流は、盛んであるとは感じなかった。

だがBoさんは「開かれたコミュニティーにしたい」と考えているようで、私もそうあるべきだと考える。


大盛況のオーガニックショップ

周りの社会との関わりは、「コミュニティー」として独自に存在するからこそ、積極的に構築していかなければならないと思う。これからスバンホルムが具体的にどのような仕掛けを作っていくのか、注目していきたい。

□「安心感」

ビレッジ内で働く人はまだしも、外で働きながら「8割」もの収入を村に預けることが出来るのは何故なのだろうか。それはお金だけでは手にすることの出来ない「安心感」があるからではないか、と考える。老後の安心はもちろんのこと、食糧もエネルギーも自給出来ているので、食糧危機が起きようと、石油価格が高騰しようと、周りがどのような状況になろうとも「生きていくこと」が出来る。そして常に誰かがそばにいて、関わることが出来る。すれ違う時は、目を合わせて「ハイ（Hi）」と声をかけ合う。

スバンホルムで生まれ、育った住民は、「このような環境は、外にはないだろう」と話していた。そしてこの安心感こそが、〝幸せ〟につながっているのだろう。

エコビレッジ「自立」と「共存」との両立を目指して（第3回）

東海大学国際地域学研究科　新谷　舞子

クリスチャニアの例

□自由な町、クリスチャニア

「クリスチャニア（Christiania）」を一言で表すと、「Free Town」になるだろう。始まりは約40年前、軍隊の兵舎跡地に、ヒッピーや〝ラブ＆ピース〟を求める若者、自由と共同生活を基盤とした〝オルタナティブ〟な（新たな、もう1つの）暮らしを求める人などさまざまな人々が移り住み始めたことにある。

ここクリスチャニアは、「無政府主義」を掲げ、国家権力、警察権力などのあらゆる〝権力〟に対抗して出来た歴史を持つ。正式に誕生したのは1971年。不法占拠から始まったが、翌1972年、当時の政府がクリスチャニアを3年間の期限付きで、「社会実験」として存在を認めた。しかし3年経った後、結局何も起こらず、現在まで存続している。クリスチャニアの出口には、「You are now entering the EU（あなたはこれからEUに入ります）」と書かれた看板があり、あたかもデンマークやEUに属してないかのような主張をしている。



クリスチャニアの有名な建物「バナナハウス」

現在は、85エーカー（約34万4千㎡）以上の土地に約900人の住民が住んでいる。8つに分かれたミーティングを通して自治を確立し、重要な決定はすべて合意に基づいて行っている。

□一大観光地

クリスチャニアは首都コペンハーゲン市の中心部にあり、地下鉄のクリスチャンハウン（Christianshavn）という駅から歩いて5分ほどのところにある。デンマークに限らず、世界各地に点在するエコビレッジの多くは、街の中心部から離れ、豊かな自然に囲まれた地方に在るものが多い。これに対しクリスチャニアは、誰に尋ねてもその場所を教えてもらえるほど知れ渡った存在だ。デンマークには2009年8月現在、33カ所のエコビレッジがあるそうだが、それでもコペンハーゲン市内に住むデンマーク人のほとんどは「エコビレッジ」という言葉自体さえ知らなかった。以上のような地理的な事情が、その要因の一つにあるのだろう。

私は2カ月にわたるデンマーク滞在の間、クリスチャニアを4回訪れた。毎回多くの人々が吸い込まれるように中へと入っていったのを覚えている。それもそのはずで、クリスチャニアはチボリ公園、リトルマーメード（人魚）像に次ぐ一大観光スポットでもあるのだ。年間100万人以上の観光客が訪れているそうだ。私には誰が住民で、誰が観光客かの見分けがつかなかった。

毎日、午後3時からはガイドツアーが催される。デンマーク語と英語、それぞれのガイドが案内してくれる。ツアーの参加費は30DKR（デンマーククローネ・約600円）で有料であるが、クリスチャニア自体には出入り自由だ。中をすべて歩き回ろうとすると3時間ぐらいかかるそうで、ツアーでは約1時間半、お店などが立ち並ぶエリアと、住民が暮らす川のほとりを少し、案

内してもらった。

クリスチャニアの一大イベントは、毎年12月25日に催される盛大なクリスマスパーティーだ。2千人ほどが集まるという。有機野菜を使った料理が無料で振る舞われ、ホームレスの人たちや難民、独りで暮らすお年寄りなど、多くの人々が参加しているそうだ。このパーティーに限らず、クリスチャニアには誰に対しても〝Welcome!〟な雰囲気がある。実際、グリーンランドからの移民は、「コペンハーゲンでは疎外感を感じるが、クリスチャニアは自分の存在を認めてくれる」と感じているらしい。



パーティーの日、大道芸には子ども達も参加

□芸術性の高さ

クリスチャニア内には、レストラン、カフェ、有機野菜の販売所など、多くの食関連のお店から、手工芸品店、自転車販売店、木材店などの店舗、さらにスケートボードの練習場やライブハウス、バーなど、エンターテイメントの施設まであり、実に多種多様だ。至るところでさまざまな音楽が流れ、目をひくアートが点在している。このエンターテインメント性の高さ、芸術性の高さが、クリスチャニアの大きな魅力の一つだと思う。音楽や絵画などの「芸術」は、国を問わず、言葉を超えて、誰でも楽しむことが出来る。この〝誰でも〟というところが良い。踊りだしたり、一緒に歌いだしたりする人もいて、エネルギッシュで自由な、それでいて心地よい雰囲気を、直に肌で感じた。

川を挟んで両側に立ち並ぶ住民たちの家々もまた、とても個性的だ。しかもこれらはほぼ手づくりと言うから驚く。さらに、このような家やお店などに使用している材料の約9割は、再利用のものだそうで、まさに「在るものを生かす」というエコビレッジの核心を見る。

□これからの展望

クリスチャニアそのものが、何か一つのアトラクションのような印象を受ける。「住む場所」と「楽しめる場所」が近い。暮らすこと、働くこと、そして楽しいことをリンクさせているように見受けられ、これは個人の人生にとってはもちろんのこと、日本の社会全体に対しても参考に出来る部分があるように感じた。

これからのクリスチャニアの展望については、ガイドブック「Christiania guide」に次のように記載されている。

①建物の増築

現在、クリスチャニア内に建物を建てることは国から禁止されているが、将来的には、高齢者向け住宅や研究者向けの住宅を建築したいという。また世界中から来る旅行者が格安で泊まれるような「グリーンホテル」の建築も考えているそうだ。

②独立した学校の設立

国内外を問わず、さまざまな生徒が集まれるような学校、またクリスチャニアのアーティストとともにビジネス創出を考える学生のための大学、さらに「自治のための学校」などの設立を希望している。

③世界に発信

これからも「アート」、「文化」、「建築」といった分野での〝革新〟を促進していく。クリスチャニアの社会構造や経営組織、クリスチャニアバイクや手工芸品など、さまざまな分野で世界に発信し、モデルとして存在していくという。「先進的なコミュニティーである」との自信と誇りが窺える。



クラフトショップの店内
（クリスチャニア）

□「社会実験」

クリスチャニアは住民自らが自治を行い、合意に基づく一致を求め、あらゆる権力を排除する「無政府主義」を掲げている。まさに「社会実験」という印象を受ける。前述のガイドブックの中には、次のような一文がある。

―「未来へと向かうどの過程においても、〝民主主義〟、〝連帯感〟、〝自由〟はもっとも優先されるべきものとしてとらえる」―

「社会」という人々が〝共生〟する場を創り上げる上で、必要不可欠



村内を流れる川に架かる橋。住民たちが修理した（クリスチャニア）

なこれらの要素を、クリスチャニアは最重要視し、具現化し、さらなる発展を遂げようとしている。私はそんなクリスチャニアのこれからを、引き続き興味深く注目していきたいと考えている。

□クリスチャニアのあれこれ

現地情報として、クリスチャニアで見聞きした物などを紹介しようと思う。

●クリスチャニアバイク

ここクリスチャニアで作られている自転車で、コペンハーゲン市内でよく見かけた。他のヨーロッパ諸国でも人気があるようだ。前のカゴには荷物はもちろん、人を乗せて走ることも出来る。母親が子供を乗せて走っている場面や、カゴに彼女を乗せて彼が運転をする、というカップルも見かけた。

●保育施設

1カ月800DKR（約1万6千円）で子供を預かっている。対象はクリスチャニア内に住む子供のみだが、先生の中にはクリスチャニア外から来ている人もいるという。クリスチャニアでは外に働きに出かける住民もいるし、逆に外の人がクリスチャニア内で働いているケースもあるそうだ。

●オーガニックレストラン

有機野菜を使った料理を提供しているレストランがあり、特に若者に人気があるという。ちなみにここで使用する有機野菜は、前号で紹介したスバンホルムから仕入れているそうで、「スバンホルムは友達だ」とガイドの方は言っていた。ビレッジ間でこのような連携があると、それぞれのビレッジの持続性が高まるだけでなく、個人の得意とすることを仕事として成り立たせられる仕組みが出来る。「好きなことを生業としていく」環境を創り出すことは、一人一人がより自分らしく生きるために欠かせないのではないか、と考えている。



クリスチャニアバイク

トーラップの例

「トーラップ（Torup）」は、コペンハーゲンから西へ約50㎞、電車を使うと1時間半ほどのところに在る。最寄り駅であるディセキレ（Dysekilde）駅のすぐ裏側に位置し、自転車で10分ほど走ったところにはビーチがある。創立は1998年、去年（2008年）で10年目を迎えた。現在は約200人の住民が暮らしているという。

□トーラップに住んで：ある住民の話

今回の訪問でさまざまなお話を聞かせてくれたのはAnders Behringさん。彼は2007年1月からトーラップに住んでいるが、それ以前からここで建築の手伝いをしていたこともあって自身も住むことを決意したという。家の建築費は75万DKR（約1500万円）で、構想も含めて約2年を費やしたそうだ。友人と一緒に建てたという家を、とても誇らしげに紹介してくれた。

彼は長時間働くとストレスを感じるため、フルタイムでは働けないそうだ。今は近くの農場で週4日、計12時間働いており、この仕事は半年ほど続けているという。国から受けている福祉のお金と両親からの援助金で、自身の家を建てたという。デンマークでは誰もが、いつでもどこでも〝安心〟して暮らすことができ、また一人一人が〝自分らしく〟生きることを社会が保障しているな、と感じているが、このような話を聞くと本当に事実なのだ、と羨ましく、感慨深い思いになる。

トーラップに住む前は、コペンハーゲン市内のエコロジカルカフェで働いており、ここに暮らし始めて変わったことは、「より社交的になったこと」だそうだ。しかし環境面に関しては住む前の方が意識してお

り、今は生活の中である程度具現化してしまったため、あまり意識して配慮はしていないと話していた。確かに電気や音楽をつけたままにして外出していたことは気になったが、土にも自身の体にも良い有機の食品を積極的に購入したり、庭のコンポストで肥料を作ったり、熱効率の高いフィンランド製のバイオマス・ストーブを使用したりと、身近で出来ることは行っている様子だった。

またあまり時間に捉われずに生活している印象を受けた。たとえば晴れたらテラスでお茶を飲んだりギターを弾いたりし、友人が通りかかれば談話をしながら一緒に食事をする。その時どきの環境によって、柔軟に暮らし方が変化するし、変えられる。これこそ、自分にとっても周りの環境にとっても一番〝ナチュラル〟なのではないか。そしてよりナチュラルに生きられることは、ゆとりを生み出し、ささやかな幸せへとつながっていくのだろう。

□徹底しているエコロジーな取り組み

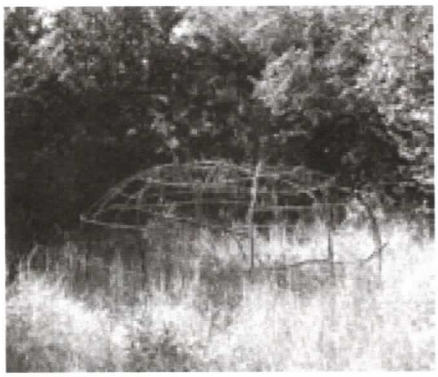
トーラップの特徴は、何と言っても自然環境に配慮した取り組みの数々である。住宅はそれぞれにエコ・フレンドリー（環境に優しい）なポイントを有していて、六角形の家、ドーム型の家、屋根だけでなく家の裏側まで草を生やしている家（このような緑化はビオトープ＝多様な生物が共生する場＝や断熱効果を促す）、太陽の光をふんだんに取り入れられるテラスを組み込んだ家など、実に多種多様だ。またどの家々も芸術性に富んでいる。とてもオシャレで、見ているだけで楽しくなってしまう。中にはワラや粘土などの〝自然素材〟で造った「大地に還る家」もあり、その素朴さとデザイン性、そして徹底ぶりに感激した。

クリーンエネルギーの創出にも熱心である。風力エネルギー、地熱エネルギー、木質バイオマスエネルギー、太陽光エネルギーなどを創り出している。どのエネルギーを使うかは、各自で決めることが出来る。また「汚水の浄化」もビレッジ内で行っている。浄化作用のあるヤナギを生い茂らせ、そこに食器洗い機やトイレから出た水を集める。ここで浄化し、そのまま土に還している。この浄化システムは2、3年前から始めたという。このような暮らしに結びつく知恵こそ知りたいし、どんどん伝え広めていくべきだと思う。


右手に見えるのが家の裏側まで草を生やしている家（トーラップ）

□神聖な「瞑想の場」

トーラップでは瞑想をする場所を設置している。かまくら型の空間の中に温めた石を置き、外側を黒い布で包む。住民はその中に入り、汗とともに「悪いもの」を流すというのだ。これはカナダや北アメリカの古い伝統的な考えだそうだ。


ビレッジ内に設けられた「瞑想の場」（トーラップ）

この「悪いもの」を指すものは色々あると思うが、例えば心の中のモヤモヤ、ドロドロした感情などが挙げられるだろう。エコビレッジの国際的なネットワークであるGlobal Ecovillage Networkでは、エコビレッジの三つの側面の一つに「精神性」を掲げている。これは特定のしきたりや宗教があるということではなく、それぞれのビレッジがさまざまな形で、自らの、そしてビレッジ全体の精神性を高めていることを意味している。意識や価値観、想い、夢、希望など「内なるもの」が自身の人生の核になるし、社会を創り上げる。自らと向き合う、周りと深く関わり合うことは、気付くこと、知ること、感じること、考えること、実際に動くことの大きなきっかけになる。エコビレッジは、このようなきっかけ、そしてその実践の場ではないか、と考えている。

〝平和と〝愛〟にあふれたエコビレッジを創るには、住民一人一人が自らを律し、周りとの〝調和〟の精神を養っていなければならない。さまざまな「多様性」を尊重することが、持続可能なコミュニティーづくり、社会づくりには欠かせないと思う。

エコビレッジ「自立」と「共存」との両立を目指して（最終回）

東海大学国際地域学研究科　新谷　舞子

これまで3回にわたり、エコビレッジの概要、そしてデンマークのエコビレッジを3ヵ所ご紹介してきた。最終回となる今回は、日本におけるエコビレッジムーブメントと先行事例についてお伝えしたい。

第3回エコビレッジ国際会議

2009年4月24日～26日の3日間、東京ウィメンズプラザにおいて、「第3回エコビレッジ国際会議」が開催された。日本での開催が今年で3回目となり、過去には2006年と2007年に開かれている。私は今回初めて参加した。名称には「国際会議」とついているが、誰でも参加出来、1日のみの参加も可能である。参加費用は3日間通しで14000円、学生は12000円だ。ちなみに次回の会議は、2010年5月に持たれる予定である。

□充実した3日間

今回の会議には「Global Ecovillage Network」（エコビレッジの国際的なネットワーク機関）の創始者、Ross Jackson（ロス・ジャクソン）氏とHildur Jackson（ヒルダー・ジャクソン）氏夫妻がデンマークから来日し、参加された。彼らは世界的なエコビレッジ運動の第一人者である。またスリランカから持続的なコミュニティー発展のために活動をしているVinya S. Ariyaratne（ヴィンヤ・S・アリヤラトネ）氏が、韓国からは、地域再生やエコビレッジ創設に関するコンサルティング事業を行っているKyoungsoo Lim（リム・キョンス）氏が来られ、講演された。加えて、日本国内にてエコビレッジに関連する事業や活動を行っているさまざまな団体、企業、個人が報告や発表などを行った。

3日間にわたり53個ものプログラムが催された。主として講演と分科会であったが、他にもワークショップあり、コンサートあり、情報交換の展示スペースありと、多彩な催しが持たれ、延べ900人が来場した。この数字を見ると、日本でも「エコビレッジ」が注目されつつあることが分かる。全体的に学生や若者の姿はあまり見られなかったが、幅広い年齢層の人々が参加している印象を受けた。

非常に充実した3日間で、休む暇なく講演等が行われた。2、3のレクチャーが同時並行して行われることも多く、選択に迷った。しかしワークショップやディスカッションなど、他の参加者と話す、交流する、共有する機会があまりなく、この点は残念に感じた。

□第一人者が語る「エコビレッジ」

デンマークのJackson夫妻は、第一日目の24日に基調講演された。Ross氏は講演で、「エコビレッジ運動は、グローバル化危機に対する戦略である」と述べ、エコビレッジ創設への支援を世界的に行っていること、またオルタナティブ（既存のものに代わる）な銀行を設立し、さまざまな分野での自給自足を支えていく必要性などを訴えていた。Hildur氏はエコビレッジを「エコロジー」「社会」「経済」「世界観」の4側面に分け、教育プログラムとして提供しているEcovillage Design Education（以下、EDE）について、「世界中のあらゆるコミュニティーの"経験"を集め、これらを体系化したものがEDEである」と説明した。この

EDEは国連の「持続可能な教育（ESD）のための10年」で重要な位置を占める、国際的な教育カリキュラムである。２００７年以降、既に世界12カ国15地域以上で開催されているそうだ。日本でも昨年、後からご紹介する静岡県の「木の花ファミリー」でアジア初、日本初のEDEが開講された。

15年にわたりエコビレッジに注目、研究をされている日本大学生物環境工学科教授の糸長浩司先生は「環境危機世紀　持続可能なコミュニティーへの挑戦」と題し講演され、「それぞれの人が、それぞれの立場で、それぞれのコミュニティーが頑張る」という〝蜘蛛の巣型〟でエコビレッジ運動を行っていくこと、また日本の特徴として農村にコミュニティーが残っていることを挙げ、「長期的な視点に立ち、持続出来るコミュニティーを考えていく必要がある」と呼び掛けていた。

□横への広がり、下への深まり

２日目に行われたワークショップ「みんなで語ろう・つながろう。エコビレッジって何？」では、「どんなエコビレッジに住みたいか？」というテーマで、参加者同士が意見を交換した。全体的な印象として、「公」と「私」のバランスを重要視する声が多かった。こうした公私のバランスは、時間的、空間的、物質的だけでなく、「適度な距離感で、しかし心の奥底でつながっている」という〝精神面〟からも理想として挙げられていた。非常に興味深い意見だと思う。実際、デンマークのエコビレッジ住民もまた、さまざまな分野における「良いバランスの追求、創出」を重要な事として捉えていた。この発表では他に、

・三世帯で役割分担をする（例えば、高齢者・手仕事、若者・力仕事、子供・家庭の仕事など）
・価値観を共有し、自分を変えていく
・経済的に自立出来ると良い
・夢を語れるビレッジ
・赤ちゃんから老後まで、安心して住めること
・ネットワークしていく
・移り住めるビレッジ。いろんな物や人が入ってくる
・都市型のゆるい共同体

などが挙げられていた。どの意見にも、首を縦に大きく振ってしまう。このような理想、夢、希望、そして出会い、時間、経験などの「共有」は、人生をより豊かにするものだと実感し、確信している。最終日のフェアウェルパーティーでは、〝熱く〟も〝温かい〟人たちと出会うことが出来、とても嬉しかった。どんどん横につながっていき、ますます関係を深めていきたいと思う。

これからは「縦」ではなく「横」の、「上」よりも「下」への時代だと感じている。これまでは「上へ上へ」とのみ目を向けてきたが、足元を見る、自己を内省する、表面下にあるものを見る、など「下」または「内」へと意識を向けることが、非常に重要だと思う。そして自身の生活から始める「下からの力」が、何においても必要不可欠だろう。

木の花ファミリー

□日本エコビレッジのパイオニア

国際会議に参加し、日本においてもエコビレッジの〝萌芽〟が、各地で生まれつつあることが分かった。その中で、既存のエコビレッジとしてまず紹介されるのが、雄大な富士山の麓に位置する「木の花ファミリー」だ。現在日本に存在しているエコビレッジは、建築家が主導となり、建物などの「外」、つまり「ハード面」から入っているものが多い。これに対し、木の花ファミリーは、共通の価値観、同じビジョンのもとに集まり始まった、「内」からのビレッジである。１９９４年、「血縁を超えて助け合う暮らし」を志し、20人のメンバーが共同生活を営み始めた。創設メンバーの1人である古田館佐美さんは、設立当時から大切にしていることとして、

・環境保全型の有機農業と循環型の暮らしによる、自然と調和したライフスタイル（その土地で採れたものを食べる、という健全さ）
・共同で暮らすことによって得られる、調和の精神

の2点を挙げていた。「調和」という表現は、木の花ファミリーをよく表


木の花ファミリーの中心

している と思う。

私はこれまで2度、ファミリーを訪問した。そのうちの1回は宿泊し、1日を通して暮らしを体感した。彼らは1ヵ月に1度、「生活体験ツアー」を開催しているが、それ以外の日でも、滞在させてもらうことが出来る。また2回目の訪問では、農作業体験（無料）、見学ツアー（有料）、プレゼンテーション（有料）をお願いした。木の花ファミリーには毎年、国内外から多くの訪問客が訪れている。2008年は1年を通して、約2000人が来村したそうだ。関心の高さが伺える。また昨年のEDE受講者の中からは、実際に〝エコビレッジ創設〟をスタートさせている人たちもいる。経験の享受、情報の収集、つながりづくりなど、木の花ファミリーは多くの点で、プラットホームになっているようだ。


木の花ファミリーでのある日の昼食風景

□木の花ファミリーに暮らす人々

2008年10月時点で、16世帯54人（男性22名、女性32名）の住民が暮らしている。30代～50代が全体の約6割を占めており、メンバーの出身地は東北、関東、中部、近畿などさまざまだそうだ。近年、20代、30代の若者が移り住んできていることは、興味深い傾向である。ライフスタイルや生き方に惹かれて来たことに間違いはないが、経済的に余裕がない若年層は、なかなか移住まで踏み切れない。実際、デンマークのエコビレッジ住民には子持ち家庭が多く、単身でエコビレッジに暮らしている若者というのは非常に稀である。この現状は、日本のエコビレッジにも当てはまる。「家を所有する」という要因が1つにあると思うが、この点木の花ファミリーには、メンバーになるための経済的なハードルはない。条件はただ1つ、「みんなと調和し、自分が出来る役割を果たしていく意思」を有していることだ。

全員がコミュニティーのために働いており、農作物の販売などで得られた収入を、均等に分けている。2007年度の一人あたりの年収は、約72万円であったそうだ。このうち30万円は生活費に充てられるため、残りの約40万円が自身の手元に残る。これは体系的には個人のお金だが、「みんなのお金を預かっている」と考えているそうだ。そして次節で挙げる「大人ミーティング」は、木の花ファミリーを語る上で欠かせない〝中枢部分〟であると感じている。

□「大人ミーティング」

創立以来14年間、一日も欠かさずに行っている「大人ミーティング」。このミーティングはガラス張りで、地元住民や訪問客など、誰にでもオープンにされている。私がファミリーで一晩を過ごしたかった理由の1つに、このミーティングを拝見することがあった。

ミーティングではまず初めに、その日の作業報告、金銭の出し入れ、翌日の作業の手順、人の配置など、事務的な連絡事項を確認する。話のそばからその内容をパソコンに打ち込んでおり、ゆったりとした生活スタイルと対照的な風景が、何だか面白かった。事務連絡が終わると、内面のシェアリングに入る。この時のメンバーの発言の一部を、箇条書きにしてまとめてみる。

・木の花ファミリーは、エコビレッジでも農的共同体でもない。「アシュラム」（修業道）である
・生きていくことは、忙しいこと。働くことは、喜びであるはず
・仕事がある、やることがあるということは、「自分が必要とされている」ということ。ニートやフリーターになってしまうのは、その人たちの「やること」をとってしまっているからだ
・昔は社会にしばられていたが、今は多様な生き方が出来る。しばりを超え、多様性が生み出されることこそ、豊かなことである
・EDEを提供しているが、知識だけで上手くいくはずがない。ここでは毎晩ミーティングを行っているが、このような〝生臭い〟部分は、共に暮らす上で欠かせない

午後9時に始まったミーティングは12時を過ぎて終了したが、あっと言う間に感じられた。1日の出来事を振り返り、その日に自分が思ったこと、感じたことを話し合う。自分の言動が周りにどのような影響を与え、何をもたらしているのかが分か

る。上記には少し哲学的な発言を紹介したが、あるメンバーの良くない〝癖〟や個人間のトラブル、恋愛のもめ事などの話も出ていた。「生臭い」という意味が、少し分かった気がした。共に暮らす、共に生きるということは、素晴らしくもまた難しく、厳しくあることを、彼らは自身の生活を通して伝えているようにも感じた。そしてこうしたやりとりが出来る基盤には、お互いを信じ想い合う「信頼関係」と、相互への「愛」があるのだと思う。

□これからの夢

古田さんは、「全部の共同体がつながり合い、〝ただいま〟と言える関係を作る。最終的な目標は、地球がエコビレッジ化することだ」と話してくれた。しかしその実現のために、何か大きなプロジェクトを作っているわけではない。ただ自身の生活を丁寧に生き、森羅万象、周りの人々との調和を感じながら、日々を過ごしている。このような意識を持って生きる人々が増えてゆけば、自ずと自らが理想としている方向へと向かっていくだろう。

「問題をただ解決するだけでは、意味がない。自分の〝心〟が言葉、行動などの形となって表れている。だからこそ、内省することが必要なのだ」。古田さんのメッセージは、世代、時代、国境を超えて、共有されるべきものだと思う。

「エコビレッジ」を通して

全4回に渡り、確かな未来のモデルである「エコビレッジ」について紹介させていただいた。しかしこれは現在の一過程に過ぎず、エコビレッジ運動は穏やかに、しかし急速に広まりつつある。先進国と発展途上国、都会と田舎、男と女（！）関係なく、広がり、浸透してきているように感じる。エコビレッジの4側面である「エコロジー」「社会」「経済」「世界観」における〝持続可能性〟の追求は、これからますます意義と重要性を増すだろう。

エコビレッジはそのものが〝プロセス〟だが、何事もその過程が苦しみや我慢だけでは、続かない。続かなければ、持続可能ではない。「楽しむ」の英訳である「Enjoy」の語源は「en」（～の中に）と「joy」（喜ぶ）である。つまり「喜び」（joy）は「前」（Pre）でも「後」（Re）でもなく、「中」（En）にあるのだ。「楽しいから一生懸命やるのではない。一生懸命やるから楽しいのだ」と、経済評論家の勝間和代さんは述べているが、エコビレッジ住民は、両方を創出し、獲得しているように見える。つまり「楽しいから一生懸命にやる」のであり、「一生懸命やるから楽しい」のだ。彼らの前向きで自発的な姿勢には、いつも感銘を受ける。もちろん良いことばかりではなく、苦みも難しさも、たくさんある。だが人と居ること、人と共にすることで起きる〝ミラクル〟と〝必然〟は、「楽しみは倍に、悲しみは半分に」だろう。

一点のみに視点も重きも置き、さまざまなものを分断してきたこれまでだが、これからは「つながり」を意識していく必要があると考える。それは例えば、「過去」「現在」「未来」のつながり、「頭」「心」「体」のつながり、また「あなた」「みんな」「私」のつながりだ。これらを意識し、「可能性」と「多様性」、そして「つながり」を創り上げているエコビレッジ。Ecovillageは、「Ecological」（エコロジカル）で、人々が「Coexistence」（共生）し、「One for all」（1人はみんなのために）の精神のもと、これからもゆるやかに発展し続けていくだろう。



営業ご案内

ご結婚内祝、お中元、ご出産内祝、ゴルフコンペ賞品、御祝、
お歳暮、セールキャンペーン用品、快気祝、芸事発表会、
訪販用品、社内の運動会、誕生祝、展示会ご来場記念品、
ごあいさつ用品、ご新築内祝、ご進学内祝、ご婚約記念、
落成記念、永年勤続、忌明志、年末あいさつ用品、
お買い上げ記念品、ご来店記念、誕生祝、ご拡売感謝

Gift Plaza 三ズ！ 記念品の総合商社 株式会社美図連
Premium & World Goods
札幌市中央区大通東7丁目水野ビル TEL011-231-6612 FAX011-271-1132